

軍事力への洞察

作家にとって最初の作品には、作家の特徴の全てが内包されているという。35歳の半藤が書いた『日本のいちばん長い日』（1965年）にもこれは当てはまる。玉音盤による終戦の詔書がラジオで放送されたのは45年8月15日正午。そこに至る内閣・宮中と徹底抗戦派との攻防の

今年1月に暴逝した半藤一利さん。穏やかな死の床で生産の伴侶・未利子夫人にこう語ったという。「墨子を読みなさい。日本人はそんなに悪くはないんだよ。ごめんね、先に死にます。日本人は悪くない、ではなく、そんなに悪くはないんだよ」と言い遺した半藤さん。編集者として初めて仕えた作家・坂口安吾から歴史探偵学を継承した歴史探偵が「そんなに」に込めた含意は何であったのか。作品からたどってみたい。

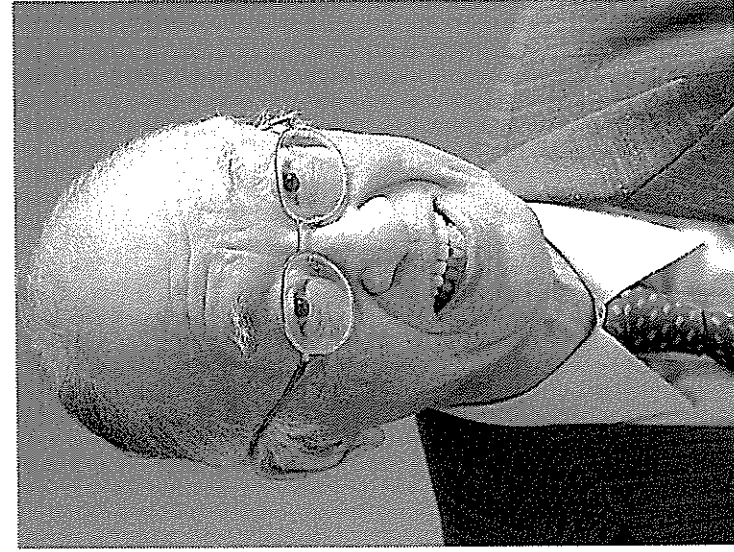
ひもとく

追悼・半藤一利さん

東京大学教授（日本近現代史）

加藤 陽子

日本人は「そんなに」悪くはない

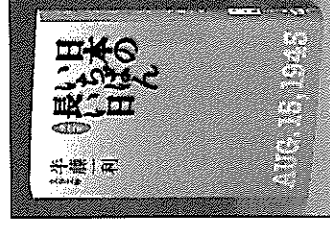


半藤一利さん（2007年撮影）

24時間に光を当てた。多くが存命だった当事者に徹底的に取材し、史料を博覧した半藤。ポツダム宣言受諾による終戦がいかに紙一重の真剣刃渡りだったかを史劇として描いた。軍事力を有する集団が暴発する危険性への深い洞察。半藤の全作品を貫く核はここにあったのだろう。自分は歴史探偵だと半藤はよく語っていた。だがこの自伝、

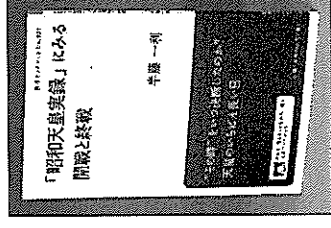
坂口安吾由来だという点を忘れてはならない。安吾は「墮落論」を「半年のうちに世相は変化した」と書き始めた怖い人だ。特攻隊の勇士は團屋になり、戦争未亡人は使徒から人間になった、と続ける。歴史というものの持つ測り知れぬ力への鋭い感性。安吾から半藤へと継承されたものはこれだった。

続いて『「昭和天皇実録」に



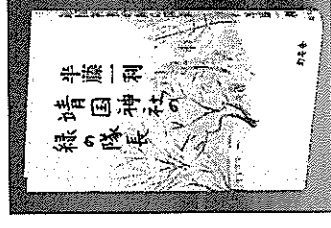
日本のいちばん長い日
決定版

文春文庫
770円



「昭和天皇実録」にみる
開戦と終戦

岩波ブックレット
726円



靖国神社の緑の隊長

幻冬舎
1480円

みる開戦と終戦』（2015年）を取り上げた。公開された『昭和天皇実録』を連覧した半藤は、『日本のいちばん長い日』の自らの解釈の一部を修正すべきだと考える。新史料からは、敗戦前の天皇と軍隊との相克がより明らかになった。半藤は、8月14日の二度目の聖断時の天皇の言葉を、軍人に対して敗戦を納得させるための必死の懇願と読むべきだという。8月10日の最初の聖断と地続きに読むべきではないとの新解釈だ。

良く生きた人々

ここで明治国家の設計者のつらさを想起しておきたい。人心帰一の機軸として、神の代わりには天皇を置いた伊藤博文。政党内閣からの影響を断つため、軍隊を天皇と直結させた山県有朋。国家滅亡の危機に瀕した終戦時、天皇の命令に軍隊は従ったのか。これが真正の勝ちだったことを

半藤の書は教えてくれる。最後に靖国神社の緑の隊長（2020年）を挙げよう。晩年の半藤は、夜郎自大的な歴史認識の既成を憂え、正しい歴史認識に必要なのは歴史的リアリズムだと述べていた。その半藤の最後の書がシユニア向けの本だったことは興味深い事実だ。

帯の意匠が「こんなにも立派に生きた日本人がいた。だぞ、身構える読者もいよう。だがそこは半藤、まきがきに靖国の歴史をまとめあげてある。いわく、天皇の軍隊の戦死者を祀る神社であること、戊辰戦争で負けた側の戦死者や、空襲・原爆の犠牲者は祀られていないことなど、わかりやすく述べている。

ある対談時に半藤が述べた印象的な言葉をご紹介したい。日本人の欠点は何かと考えると二つある、当座しのぎの根拠のない犠牲性と排他的同調性の二つだ。この言を想起しつつ本書を読むと、物語の登場人物、人間の将兵が、二つの欠点を免れた稀有な人だと気づかされる。武器を持つ軍人の根拠的な暴力をリアルに捉え、多くの作品群を世に問った半藤。その半藤が最後に、市民として軍人として良く生きた人々を描いた。余体の帳尻として半藤は、日本人は「そんなに悪くはないんだよ」と言い遺して逝ったのではなかったか。私はこう考える。

◇かたち・よさこい 60年生まれ。著書に戦争の論議など。半藤氏との対談に『昭和史裁判』。